

| | |
|-------|---------------------------|
| 研究課題 | 日本私小説の近現代文学史における展開の研究 |
| 研究代表者 | 梅澤 亜由美 (文学部 日本文学科 准教授) |

1. 研究目的

本研究は、これまで明確に定義がなされてこなかった私小説概念の定義について新たな提案を行い、また、あわせてこれまで言及されてこなかった作家たちの私小説に幅広く注目し、日本近現代文学史における私小説の全体的な様相を明らかにすることを目的とするものである。

私小説とは、作家自身が自分の身の出来事を小説化する、〈作者〉＝〈小説の主人公〉（一作中人物の場合もある）となる小説のことであり、近代日本独特の小説形式とされている。私小説は日本近現代文学史を貫く重要な柱であるが、これまで虚構を主とする小説よりも位置づけが低かったために、それほど研究が進んでいない分野でもある。そのため、明確な定義さえも定まっているとはいいがたい。なお、定義をめぐっては、海外の研究者であるキルシュネライト（『私小説』、平成 4）や鈴木登美の研究（『語られた自己』、平成 12）によってジャンル定義の困難が指摘されて以来、日本国内の研究においてもその流れは続き、日比嘉高（『〈自己表象〉の文学史』、平成 20）や山口直孝（『「私」を語る小説の誕生』、平成 23）のように、現在は「私小説」の実在性を捨象する傾向にある。

また、私小説を書く作家は、A、私小説作家といわれる私小説ばかりを書く作家、B、一般的な虚構の小説、私小説の両方を書いている作家の 2 つに分けられる。これらの総体を示す研究として、秋山駿・勝又浩監修、私小説研究会編『私小説ハンドブック』（平成 26）があげられるが、その「作家案内」では 109 名の作家が取り上げられているにもかかわらず、B にあたる作家の私小説、および A の作家と B の作家の作品の関係性についてはこれまでほとんど注目されてこなかった。

本研究では、これらの研究の現状を鑑み、私小説概念の新たな定義づけ、および、日本近現代文学史における私小説の全体的展開の可視化を試みる。

2. 研究方法

上記の研究目的を達成するための方法については、以下に記すように、研究作業、およびその成果報告と検討という手順で行った。

（1）研究作業としての一覧表の作成

まずは、作家ごとに私小説的作品、およびその小説における私小説判断の基準を抽出した一覧表の作成を行った。具体的には、個別の作家の全小説を読み、小説を私小説的作品とそれ以外に分類、さらに私小説的作品については、作者はどのように自作に自己像を投影し、読者は何によ

ってそれを読みとっているのかを明らかにするために、作中人物を作家自身と判断する根拠を拾い出し一覧表とした。その作成にあたっては、特定の作家の専門研究者に協力依頼することで研究の効率化をはかることができるため、積極的に研究協力を依頼した。

（２）研究会開催による研究作業の成果報告と検討

こちらが提示した調査項目にもとづき、一覧表の作成を依頼、研究会で基調報告を行ってもらった。その報告をもとに、互いの分析結果について検討、私小説概念の定義づけの方法、日本近現代文学史における私小説の全貌を可視化するための方法について検討を行った。

なお、研究期間内には３回の研究会を開催した。第１回の研究会は、２０１５年８月、大正大学文学部日本文学科近代閲覧室にて開催。研究作業協力依頼のため、一覧表作成のための検討会を行った。検討のための材料として、研究代表者である梅澤による志賀直哉作品についての調査報告他、数名の協力者の研究協力のもと、一覧表の項目の検討、調整を行った。第２回研究会は、２０１５年１２月、大正大学文学部日本文学科近代閲覧室にて開催。３名の研究協力者による研究作業の報告が行われ、参加者全員で私小説定義の基準について検討を行った。第３回研究会は、２０１６年３月、大正大学文学部日本文学科近代閲覧室にて開催。３名の新たな研究協力者による研究作業の報告が行われ、続けて私小説定義の基準について検討を行った。

これらの研究過程を経て、私小説の判断基準の可視化、およびそこからの私小説概念の定義づけの方法を検討、あわせて各作家を位置づける座標軸の作成を行った。今後、更に作家を増やしてこれらの作業を行い、データを増やしていく。

３．研究成果と公表

以下、１年間の研究活動を経ての研究成果について、（１）研究成果、（２）研究成果の公表、（３）今後の展望の順で述べていく。

（１）研究成果

本研究の研究成果としては、以下の４つがあげられる。①私小説を定義するためのデータ収集方法の確立、②実際の一覧表データの作成、③一覧表データの分析による新たな私小説概念定義の方法の確立、④日本近現代文学史における私小説の全貌を可視化するための図表の作成。

①については、抽出項目の詳述は省略するが、主に〈内在的基準〉（小説テキストから読みとれること）と〈外在的基準〉（作者の伝記情報と照らし合わせることで分かること）に分類、１０項目程度の私小説と判断するための基準を導入することができた。②については、現在、着実に一覧表データの作成を進めている。これらについては、研究会における基調報告者はじめ、更に特定の作家の専門研究者に研究作業の協力依頼を進めている。現在のところ、田山花袋、徳田秋声、志賀直哉、芥川龍之介、佐藤春夫、横光利一、伊藤整、坂口安吾、太宰治、宮本百合子、安岡章

太郎といった作家の一覧表の作成が進んでいる。なお、これら各作家の一覧表については、研究上のデータとしてウェブサイト作成による公開を目標としている。③④についても、②の研究作業、および研究会での検討によって着実に進展している。これらの具体的な成果の公表については、次の（２）研究成果の公表と手段に譲りたい。

（２）研究成果の公表と手段

１．研究目的で記したように、本研究の目的は、日本の私小説の展開全体を明らかにすることである。その目的を十分に達成できる論文集の刊行に向けて、今年度、具体的な企画進行をはじめることができた。すでに、出版社と企画（仮称『近代小説における〈私〉性の再検討』）を進めており、平成 29 年秋の刊行を目指している。現在予定されている内容については以下の通りであり、日本近現代文学史全体を貫く内容となっている。①『文学界』・浪漫主義移入期、②硯友社時代から自然主義、③明治期女性文学、④大正期私小説、心境小説、⑤明治・大正期浪漫派、⑥第 3、4 次『新思潮』漱石門下、⑦白樺の系譜、⑧新感覚派・モダニズム文学 1、⑨新心理主義・モダニズム文学 2、⑩昭和期女性作家、⑪転向文学、⑫志賀直哉の系譜、「調和型」私小説、⑬無頼派の系譜、⑭「破滅型」の系譜、⑮戦後派、⑯第三の新人・内向の世代。これら①～⑯の項目については、研究代表者である梅澤他、本研究による研究会の基調報告者、および参加者がこれまでの研究作業の結果を受けての分担執筆を行う。

また、他に、研究全体を総括する総論、および私小説基準を可視化するための座標、それらをふまえての私小説概念の新たな定義の提案を行う予定である。この論文集の刊行によって、本研究の成果が広く公開されることにより、日本国内、および海外の私小説の研究においてはもちろん、日本近現代文学全体の研究においても意義ある成果となるはずである。着実に作業を進め、予定通りの刊行を果たしたい。

（３）今後の展望

２．研究方法で記したように、本研究は研究期間内における 3 回の研究会の開催を通して、基調報告者をはじめ、10 数名の協力者を得ることができた。その発展として、研究組織を立ち上げ、科学研究費補助金の申請につなげることができた。平成 27 年秋、本研究を更に延長、拡大し、「〈私〉性を基準とした日本私小説の研究—海外文学、他ジャンルと比較して—」というテーマで、平成 28 年度科学研究費補助金の申請を行った。なお、〈私〉性とは、小説をはじめとした表現ジャンルにおける作り手の個人性や自伝性の問題を検討するために新たに導入した概念である。

本研究との関連、および展望を簡単に示せば、科研費申請の研究計画は、〈私小説、および日本の近現代小説における〈私〉性の調査〉、〈海外の文学、隣接する他ジャンルとの比較・接続〉という 2 本の柱で成り立っている。前者の〈私小説、および日本の近現代小説における〈私〉性の調査〉は本研究の研究手法、成果をそのまま引き継ぐものであり、後者の〈海外の文学、隣接する他ジャンルとの比較・接続〉は本研究からの発展である。後者は、海外文学、およびハイカルチャー、サブカルチャーまでを射程とし、研究の更なる波及効果を狙ったものである。具体的に

は日本の私小説、および近現代小説の〈私〉性の問題を、表現ジャンルにおける〈私〉性の問題に接続、比較することを目指している。海外における自伝や自伝的小説、および〈私〉写真や〈私〉漫画といった他ジャンルにおいても、表現者の〈私〉性（個人性、自伝性）を投影したものは多い。日本の近現代文学を出発点に、表現ジャンルにおける〈私〉性の投影、表象について研究を発展させたい。

なお、平成 28 年度の結果は不採択であったが、開示された審査結果（A 評価：全体の上位 20%）を見るに、今後、研究計画を修正、強化していくことで採択の可能性は高くなると判断できる。本研究は、一覧表データが多ければ多いほど、研究の精度が高くなる。また、上に記したように、将来的には本研究と海外文学、および他ジャンルとの接続研究を考えている。本研究の研究成果を拡大し、更なる展開への接続のためにも、今後、確実な科学研究費補助金の獲得を目指したい。

以上をもって、平成 27 年度大正大学学術助成金による研究の成果報告とする。